方向

十六

方向社

京都市上京区下長者町千本西
妙徳寺内

1975年9月15日

富士正晴初期詩篇覚書

1975 7 26

ことし、一九七五（昭和五〇）年、五月五日、『富士正晴詩集』が刊行された。一五・五×一〇　五cm、一九二ページ、羊皮装、函入、限定一〇〇〇部、の本である。長い間の渇きを医すことができてうれしく、これを発行した五月書房に感謝する。

〈隴を得て蜀を望む〉ということばが中国にある。一つの望みを達してさらにもう一つ欲ばること、と字書に説明する。その望蜀の思いが無いではない。

新しい詩集は、著者の四十二歳までの作から、五十七篇を選び　四部に分けて排列するが、選択の基準も、各詩篇の制作時も、わからない。わたしが望むのは六〇歳をこえた富士正晴の詩のすべてを制作時順に排列して一冊に収める詩集なのだ。

七月二五日、富士氏を訪ねると、そんな本は出んやろ、ということだった。たまたま本棚から、背文字のない古色を帯びた本を抜き出すと、それが、主として雑誌『三人』に掲載された、数え年二〇歳から三〇歳にいたる詩を、ほぼ制作時順に綴じ込んだ自装

本であった。これは貴重なものだ。借してください、とは言いかねる。だがこの機会をはずせば　ふたたび見ることはできぬ気もする。そのような次第で借りてきた本を前にし新しい詩集や、野間宏　富士正晴　井口浩詩集『山繭』と読みくらべ、『覆海賊の歌』に收める雑誌『三人』に関する記事を読むうちに、この覚書を作っておく必要を感じた。

この覚書では　とりあえず次のことをきめておく。

1　直接とりあげる詩集とその（略称）

（底本）　前記の自装本

（山繭）　山繭　一九四八（昭和二三）年四月一五日　京都　明窗書房

（新集）　富士正晴詩集

この外に公刊されたもので『富士正晴小詩集』がある。定本中の自注に〈詩集〉というのはこれをさすらしい。

2　作品の排列は、制作時の明らかなものはその順に、明らかでないものは底本の排列に従う。

3　山繭　新集に採録する作品は　題目　制作時　自注　異同など必要事項を記すこと

どめ、本文はかかげない。新集は原作の表記を新かなづかい・当用漢字に改めた。これを異同としては注記しない。

4　山繭・新集に見えない作品は全部ここに掲げる。誤字と思われるものも意改せず、底本に従う。変体かなのうちはかに、ふはなに改めた。

5　詩題の前につけた数字は作品番号。後につけた数字は制作月日。作品番号はわたしの便宜で与えた。制作月日は著者の自注である。日と月は・で分かつ。

6　注記の、山繭・新集の後につけた数字は、それぞれのページ数。

7　年齢は数え年。年次は西暦（西暦の末二ケタから一五を引けば昭和の年数である）

8　校記例　〈ああ〉1・あゝ　（新集あるいは山繭の）1行ああは底本ではあゝ。

一九三二年　二〇歳

0001　神々の宴　6・30　新集10　〈ああ〉1・あゝ　〈向こう〉3・向ふ　（ペン書）

0002　散歩　7・9（ペン書）

霧・

新しい竹の香がする。
水蒸気を上げて北へ流れる清い水。
川べりの黒土の路だ。

犬がくる、洗ひ立てのやうな姿。
影が長い、朝心。
眠の足らぬ瞳の中に
鮑がとぶ銀のひらめき。

いくまがり、夏山の路は
しとりしとりと朝露が流れ、
白い幹の中から鳥が鳴きかはす。

谷底より湧き上る、湧き上る、
霧。
日光は赤くもえて乱れ入り、

小鳥の声は清冽な谷川のやうだ。
阪がけはしくて息が冷たい。

0003 幽霊の村　9　2　（ペン書）

土の茫々と烟る日
京に海がうねり、
ほこりっぽい西洋館、デパート、軽気球
その向ふにすゝけた漁村が見える。

船の出入のない
さびしい海ではあるが
昔そこに繁華な街があったやうに思はれるのだ。
京のうつとはしい曇天の涯に
山々を岬としていうつな海が眠ってゐる。

すでに海は現実であり、
京の街々がまぼろしのやうだ。
風がふき白浪の立つのが見える。
動かめ息苦しい軽気球の向ふに、
重い海辺の村々が見える。

0004　秋　9　12　（ペン書）

いちゞくの実が芝の上にもげ落ちて、
白い霧が土に湿って
うすい霧の流れに灰色の門は見えず、
陽の光が柔かい生毛（うぶげ）のやうに
山腹を流れて來る。

眞珠のやうにまろいさへずり。
雀達は杉の木にすゞなりになり、

大蓼のつゝましい垂れ花がゆらゝゆれる。

向ふの山腹のいらかは、
しつとりと湖のやうにぬれて
霧のまつはる松の間に沈んでゐる。
あの奥の寺から
鐘の音が谷一杯に渡つては
又なる。

0005　巻　9　14　（ペン書）

夜深く起き出でて
巷を眺めて居れば
遠く声、白の灯はまたゝき、
港の闇を思ふ。

音もなく巷は沈み、
あれは船の灯
霧も静まり雨の上った夜更け、
あぶらのやうな港の中に
つぶやく船腹の小波のしめやかさ、
人のしんかんと眠沈んだ
あれは船の灯。

0006　赤い花　（ペン書）

曇った空に赤い花。
さるすべりのほこりっぽさ。
雑草の中からうつくしく身をもたげ
いたいたしい老婆もミイラとなり果てた。
粧ひも捨て花びらも湿った土地に落せよ。
風も渡らぬ狭い草原を、

黄色い蝶がとびめぐり、
あそこに立ってゐるのは
目のたゞれた狂人の子。
一ゝ日　草をむしって遊びほゝける。

＊以上の六篇は雑誌『三人』創刊号に発表された。富士ゝ同人雑誌『三人』成立」ゝ同人雑誌『三人』について」（『賣・海賊の歌』一九六七年・未来社）などを参照。井口浩は八このあなたの作品をよんで　僕には、澄み徹った感性がうらやましかった。あなたの言葉は、ゆたかさの点で、僕をたのしくさせてくれました。きっとすぐれた眼眸をもって居られるに違いありません。　…あなたの「散歩」で、僕は、僕の「散歩」を思い出した。その散歩の途上、僕は牛と石工と老婆と、そしてもう一人、たいへん色の白い少女をみた、と。…Vと富士あて手紙に書いた。

0007 髮 10　11　新集13　八ああV10 23 ・あゝ　（ペン書）
0008 秋 10　14

キチキチと空を打ちはぢく百舌の子。
晴天のらっぱ手、秋の旗手。
野の涯まで輝き渡る日の光。

悠々と渡る白雲、
土をふみしめてくるつやつくしい牛の仔。

水は草の根を冷え冷えと洗ひ
小魚は爽かな秋風のやうだ。

しんかんとした透明な疾風の中、
百舌の子は空を打ちはぢき、打ちはぢき、——。

＊ペン書だが作者の筆ではない。欄外に同じ筆で注記〈嶽水會雜誌　第百拾壹號　P40～41　二頁見開きに掲載されている。（昭和七年十二月廿五日第三高等学校文藝部発行）〉

0009　娘　10・17　（ペン書）

日射しは赤く弱り、
硝子窓のこはれた洋館が
草野の中に在る。

一面のすゝきは
狐の尾とも見え、
萩の赤いしほらしさも
怪しげな灯のやうだ。

草野の露は草履をぬらし
屍の白い腹をふむやうに
ぴたぴたと私は歩く。

川沿ひの路は白く陰見し、

さけちぎればばせう葉の下、
猫の兒がじっと立ってみてゐる。

待ってゐる白い娘は
黄色の帶をいちくって居やうか、
猫か狐のやうに
すゝきにじゃれて居やうか、
冷え冷えと流れる夜気に、
娘の豊かな髪の匂ひがしてくる。

080　墓所　11　30　（ペン書）

顔は忘れて了ひ声の記憶もない、
そこには静かなものの響きと
ゆるゆる廻る日時計の歩みがある。

私の心を満すものは
青い竹幹の緑の蜘蛛、竹林の深いしゞま、
暖い日ざしの中に
仲良く並んでゐる墓達の間の日向ぼこ、
そこには何かしらいゝこゝろが棲んでゐる。

墓所に坐ることのこゝろやすさ、楽しさ、
風の音がいゝ　木の葉のちるのがいゝ
墓石となった岩石の冷たいはだえがいゝ
静かに鳴く　つぐみや四十雀
白くさきこぼれた山茶花弭に
私は微笑ましくお前の事を憶ひ出す。

8二　百舌　（日付なし、ペン書）

空は晴天、湧き上る秋雲、

百舌は気短かく竹幹を打ち鳴らす。

冷たい竹林の空気に打つ読点。
百舌はほろ苦い草の実を噛みしだき、
空に戦の声をひきちぎる。
空は晴天、白雲は流れて止まらぬ。

墓所に温かい日光のかげ、
竹林は日をこばんで白い空気を含んだ。
冷徹して光る竹幹、空をうちさまたげる真青な竹葉。
青空と竹林の色に一身を浸して
百舌は鋭い刃を蔵し
鮮かに空をひりひらく。

0012 枢 12・18 新集126 ＜ただ＞3・只 ＜ひびき＞10・ひゞき ＜赤い＞11・赤・と ＜可愛い＞12・可愛い〻 ＜きこえよう＞15・きこえやう （ペン書）

0813　春　12・21　自注〈Job〉　（ペン書）

土は春だ、
山腹の暖かい桃の林、
あくびの健かに出る太陽だ。
ぶんぶん気楽げな蝿の一族。
明るい花びらは草の葉に、
白雲は空を流れる。

青空だ、晴だ、
小鳥らは里から帰って來た、
かうして俺も登って來た。
爽かに水っぽい草の茎をかんで居れば、
つくづくこゝがなつかしい。

のびのびと横になった向ひの山

青く新芽の匂ふ雑木林、
静かに温かい風が吹き、
つくしんぼうもよく伸びてゐる。

一九三三年　二一歳

0014　街　1　12　孔版　書き手は富士（以下、書き手がかわる時以外は記さない）

高い梢の向ふで
白い雲がうねってゐる、
街はお祭りだ。

靴屋の前を通って行く
小さい靴　大きい靴
赤いリボンの靴　柔らかい長靴
雨上りの風が吹き通し、

広い街道はまっすぐだ。

指物師と小鳥やは友達、
大工の娘は小學校の先生、
みんな集ってお話しの最中。

白い鳩が
空一杯に円を作ってとび、
森の向ふはにぎやかだ。
のろのろやってくる牝牛の行列、
背の上には百姓の子が一杯だ。

8.15　冬　1　14（ペン書）

すっかり寒くしてくれ。
牙をならべた山裾の竹林。
大笑いする椿の林。

畑には霜が解ける、
日かげには氷がかたい。
雲雀は昇る、澄んだ青空。
「春が見えるぞ、春が見えるぞ。」

太陽よ。仲の良い愚かな太陽よ。
春を呼ぶな、冬をとめておけ。
氷の父親、透明な建築、
あの青空を高く残せよ。
常緑樹の仲良いざはめき、
つやつや光る植込の生垣。
健康な雄鶏は益々元気だ、
激しい雪雲は空一杯に肩をはる。

0816　若宮　1・14　（ペン書）

時間の婆さん。
もう知ってねるのだ。
お前は赤ん坊ぢやない、
お前は娘ぢやない。
俺はさよならしよう。

電柱の上からでも
ポストの中からでも
可愛いゝ眼をしてにらむがいゝ。
ぐるぐる動くうまい義眼、
毎朝磨くいゝ匂ひの歯並び。

時間の婆さん。
俺はかけ出して行かう。
のりのきいたスカートで追つかけてこい。
俺は早い、俺は早い、

俺は素早くさよならをする。

0017　海　1・29　新集78　（ペン書）
0018　初夏　2・10

湧き出る清水、もえ立つ雑草、
無器用な花びらをくつゝけ
樹木は谷あひの斜面を上る。
墓場よ。
茂みの中の正方形の正午。

傾いたりつゝたつたり、
一つ一つの墓がそれぞれの旺んな楽器、
執念(しうね)く燃え上る緑の葉の冷たさ、
渦巻け、青の大音樂、
と法もない大渦のゆりかへし。

茂みは墓をもちあげる。

熱い日光は力強く空より下り、
海の匂ひと雲のまぢり合ふひゞき。
凝灰岩は山頂に白い粉をとばし
黒い太陽は重い白雲を耀き、通る。
白色の墓の靜けさ、
正午の默り切つた青の音樂。

8.19　蜜蜂　2　10

正午の太陽は二つ
靜かに蜂の瞳にまわる。
花は白く豊に熟れ
空は円く垂れ下る――

蜂は飛び立つ、
蜘面よりむらがり上る水蒸氣の底を。
黒い花びらが呼吸してゐる花園を。
胴に鐵は規律もってすれ合ひ、
耕かされる畝のやうな羽根の肩、
空氣はこり、蜂は青空に消え失せる。

白椿の花の奥底に靜かに眠る正午の風、
白雲は太陽をのせて　満ち足りた心の中へ下りて來る。
何もかも　平和な白い花びらをめぐり、
愛らしい寢息がどの小石からもきかれる——
黄金の鏡、粉末の黄金、
流れかへる一匹の蜜蜂は
再びもぐり入る椿の花の花粉の奥處。
正午の日光と蜜蜂の眠り。

0020　春　2・16

日かげに木を打つきつゝきの朗らかさ。
時は野の水盤にわきあふれ、
深い影の交る森の中、
すみ〳〵まで小川のやうに明るい、
森の正午、椎の木のつぶやき。

枝を渡る茶色の小栗鼠
若葉の底のおしやべりな小鳥ら、
地の上　草の中　暖かい日光の中、
蟲どもは集ってお祭りをやる。

白い雲は暖かく森を越えて流れ、
誰もかれもが唱ってゐる。
背の高いねむの木は身をゆすり、

静かに吹きすぎる正午の微風、
流れ行くせゝらぎの底に
白い小石も歌ひ、
又もり上る小鳥らの合唱。

0021　機関車　2・16　新集16　〈機関車〉題2 29　汽関車
0022　五月　3　26

白南風と白雲と太陽と
蒸は行を産み　草の莖は伸び、
ぶんぶんと夏の香りのする茂み、
蜂と蟻とは駆けまわる、
サラサラと砂川の上の暑い熱。

四月の屋根と波立つ瓦と、
陽炎は音もなく空に渦まき、

輝き下る萬年雪、
火にそゝぐ脂のやうに
冷たい水の青い激しさ、
盆地一杯に分流する。

もり上る苔葉の茂り、
明るい日向　暗い日かげ
はり切つた青空の涯に
繭に似た白雲、砲弾の白雲、
土の上　櫟櫚の花粉は散り
はつたはつたと尾を打つ黒影。
鯉のぼり、矢車の鳴り。

0023　朝　3　新集85　（孔版の書き手は井口浩。日付は年と月だけ）
0024　白南風　4・5　新集82　〈棕櫚〉1-26・櫻櫚
0025　山寺　5　（井口）

雨は晴れ
水晶の泉の上に歸り來る瑠璃・

寺々に僧はしめやかに行きかひ、
まきかへる芭蕉の下
蟻の行列は音もなく止まらぬ。

杉の梢に風は涼しく
青い柿の芽よ　竹の新芽よ
ぴしぴしとなる竹のしわりに
森閑と圓い平和な世界。

山犬の遠吠えがやわらぎを深める……。

0026　寺　5　（井口）

1

かっと開けた正方形の空、
明るい風だ……。

圓い柱の太さ、
いらかでうづもった力強い屋根のうねり、
青空も　白雲も押し上げ、
逆ふ日光、涼やかな重み……。

2

白壁の泥土、厚い杉の茂み、
本堂の奥で太鼓が鳴る。
心やさしいふくろふの鳴く音は

太鼓の音に調子を合はす。
青い聲をふりまく雀ら。

……聲を失ふふくろふ、
何處だ。
樂しいこゝろのかすかな疲れ。

3

古經をおさめ
森閑と蟻地獄のひそむ經堂、
巷は遠く
窓をとぢす青葉のかげ、すみきった時のしたたり……。

湧き出るやうに茂みを越す鳩の群、
翼は空氣をならし、舞ひ來る屋根の上、

……鳩の鳴かめ静かな一時。

0027　若者　5　新集20　＜向こう＞15・向ふ　＜体＞20・躰　（井口）

0028　青空　6　新集87　＜白雲＞1　白雲（しらくも）　＜楕円＞9・円隋　（井口）

0029　朝　6　（井口）　第5行＜この維なさ、＞を鉛筆で抹消。

幼ない心はるりのやうに青い、
世界は湧き上る泉のやうに圓い。

圓い掌　柔らかい雨脱
白雲と白い花びら。

この維なさ。
何でも湧き　何でも燃え、
どんな花でも咲きあふれる……。

0030　仔虎　10　13　（井口？）

――私に親しい幼ない妹弟達に。

一面の笹のはっぱがさらさらと鳴り、
ゆるやかなスロープにおちてゐる雲の影、
空はやわらかに光を含み、
すゞやかに湧きこぼれる日光の滴り。

まっ青な露がむぞんにくだけ散り、
仔の虎が群って現れて來る。
やわらかいあごにあくびがわき出し、
すこやかな黄金の光はくびにからまる。

仔虎は尾をふる　その重みの快さ、
快活なバッタは草から草へひゞきつゝ飛び
木の幹をめぐって小さい蛇が梢へ行く、

カラカラと鳴る木の實　草の實、あたゝかい空。

一列に黄金の眼をかゞやかし、
いたづらな空が雲を走らす、
スロープ一杯にかけめぐる仔虎、
それらのふくみ聲はものをはぐゝむ力をもつ。

近くの丘のねむの木の底、一羽の鷹が子を育て、
草の莖が巣をつゝんで暖かい、
蛇の巣　山猫の巣　兎の穴、
何もかも青空一杯見とほしの天氣ではないか。

眼が細まり　太毛の四肢を舐める舌、
兄弟姉妹　一緒にころがり
さいかちの實の鳴るひゞきに氣がとほぞかる、
空腹のはるかなるなごやかさ、母のあはい姿。

どこまでもすみ渡りあたたかく息づく大地、
スロープに再びおちる白雲の軽い影、
蜜蜂、胡蜂、ぶんぶんゆらぐ白い花、
さゝやかなよろこびが一杯にゆれて草の香り。

草の茂りがまわりにもえてあつたかい。
草の茎をかむのもあいたが
仔虎の上にとびかゝる巨大な母虎、
怒りわめいて四散する虎の仔、明るい土に静かな日光。

母虎は仔虎をよびあつめ、
鳶の子は親と一緒に梢に沈む、
日は高く、かすかに香り高い虫の声、
仔虎の群りは一列となり、母虎の尾がちらちらとみちびいて行く。
草の中、笹のはっぱのなるひゞき、ねむの梢に明る日光が眠りこけ、

仔虎は歩みつゝ遠い山々の夢を見る。

003ー　朝　10・23（井口？）

――彼女は獅子の首をもつ（ロダン）

一羽の鳥は空のしたゝり、空を流れ、
樓閣は屋根のいらかいらかに風を含む、
深く土にくひ入る青空、
涯もない蔦みはつねに冷たく
茂みの底、打ちかはす枝、日を蔽ふはっぱの露、
いつまでもかはかぬ泉がある。

聳える絶壁は古い寺々の如くおごそかに
うるほひ濕る岩の根はどこまで深い、
山川のすみゝくまでみたす青空の中に
犯しがたい靜寂が座を占め

深くしみ入る流れがある。

白雲はとけ、滴となる朝の掌の中
それは私の掌に流れ入る、
犯すべからざる朝が永遠に私をつゝみ、
お前、愛するものの姿がある。

私は私の掌をもつてお前を私のものとする。
葡萄の葉つぱに露が流れ
鳩　鷹、大鷲、あらゆる鳥が空に泣きはじめる。
すべてのものは冷たく巨きく朝に滴り、
お前　そのまゝにして一つの朝、
泉の底に湧きほとばしる時間があり、
お前の底に私を生かす空間がある。

一九三四年　二二歳

0032 芭蕉 1・13 新集25 〈厳しさ〉8・嚴しさ

0033 雪晴れ 1・20

小曲

雪晴れ
弁流に日は眩しく、
落ちてくる梢の雪、
山腹を削ぎ去って、明らかな谷間の空。

寺々を埋める林、梢のみずみずしさ、
静かな疲れが澄んで行き、
輝く雪に 私は死ぬことを怖れない、
音もなく雲のとけ入る清らかな白書。

0034 雪晴れの鹿 1 新集89 底本は副題として「小曲」の二字がある。〈あたたかい〉8 あたゝかい

0035　蛇　5　1　新集28　底本は題下に（未定稿）とする。＜意志＞5・意志（こころ）＜あたたかく＞7　あたゝかく　＜ひびき＞9 15・ひゞき、＜ふりそそぎ＞10・ふりそゝぎ＜したたり＞28・したゝり　＜のしかかる＞44・のしかかる　＜ここにも＞59・こゝにも　＜かがやき＞60　かゞやき、＜こころよく＞62・こゝろよく　＜かかる＞56・かゝる

0036　虎（未定稿）　5　2

眞黑な梢をおしわたる風、
地の上を移り行く闇黑、
空間の涯の無さ、闇の重さ、
檻の中に闇一杯の虎が在り、
足元の大地を寒氣がつらぬく。

ふみ古した大地の上を虎は歩く
掌に量る彼自らの肉體（からだ）の重み、
重い跳躍がぐるりの闇をひらがせ、
密生する太毛に闇色の水がざゝうざゝうする。

斑に燃える白熱の火の息吹、
闇の中、吹雪は激しく虎を襲ふ、
虎の膚を摩擦し盡し　飛び散る雪氷、
空一面の虎の肉體に
きらめく稻妻の老ひ。

壓しかゝる粉雪の浮動する肉體を
そばだつ絶壁が眞正面からのみ、
逆に、滿ちあふれる野獸の肉體、
岩石の凹凸が激しく噴き出す眞白な虎。

怖ろしい靜けさに立ちどまる彼、
寺々の柱に、岩石に凍りつく雪、
空しい白毛はかんかんと凍てつき、
未來につき入る彼の體、

彼の耳はザラザラと雪に鳴り過去にとがる、
深い彼の瞳に吹きこむ粉雪。

彼のうなりは靜に、彼の歩行の輕さ、
吹雪の重みに均衡(つりあ)ふ彼の重み
吹雪の光を鍾め彼の保つ白い輝き、
音もなく吹雪の奥底に跳躍する……。

澄んでゆく空間　青空の重なる暗さ、
すきとほる闇黒の深みに自(おの)かう幼な兒が生れ
白雪の虎をよびよせる彼の肉體(からだ)
幼な兒の肉體(からだ)をつゝむつめたい闇の耀き。

幼な兒の眼は空しく無數の星をのみこみ、
彼の體の奥深くもえさかる日光、
檻の老虎を凝視する幼な兒の眼は嚴しく盲ひ、

快いいぶきのつゝむ幼な兒の顏の広さ。

寺寺の柱がうなりつつ密集し
苔い虎の脊に吹きつける風、毛が逆立つ、
くづれる雪は岩脈をけむらせ、
地にまき上る軽い粉雪
幼な兒の裸の足が雪を踏み抜き、
従ふ未來の虎のうなり、
足跡の泉をとかし、雪にしみいる永遠の闇。

老いたる虎は檻に立ち盡す、
重い闇黒が松の葉つぱにのしかゝり、
吹雪の暗さ、涯もない雪がつもる、
闇黒を見つめる虎の瞳に重なる闇黒……。

虎は闇に身を抛げ出す、

闇黒に冷たい彼の眼がきびしく
空しく松を吹きぬく吹雪のひゞき、
松を越え夜空は涯もなく重く
永遠の闇が雪をおさへる。

虎けめけ出す
雪を超え、夜空を超え、
底の底より輝く闇にすべてがよみがへる
ぱらぱらとちる松の葉っぱ、笹の葉の雪、
まっ白な一筋の巨きな檻の中、
積雪に横たはる一匹の静かな虎が在り、
朝の光、闇そのものの吹きそめる朝風。

積雪にまかす彼の體を冷たい朝の世界がつゝみ、
涯もなく降る雪、
一つ一つの粉雪がしづかに時間を含み、

けむりつゝ明るい空間の奥底、
虎は音もなく朝の中心に在り、雪に彫られる
一匹の雪の野獣。

0037　鷹　7　14　（井口？）

見晴らすかぎり白雪の山々が波打ち、
谷々に湧く一片の雲もない、
牙のやうな岩石をけづつて激しく吹きつける風、
厳しく両肩をはり、松の根本に鷹は居る。

冷たい木々は風にくひ入り、
仰向けにみがまへる鷹、鋭い嘴、
静かにねらふ鷹の眼はきつく澄み、
深まる青空を遠くつらぬく。

0038　豹　7・15　新集35

0039　冬の空（習作）　これと次の「暗い雪」は制作時を記さぬ。共にペン書。

数限りない群鳥（むれどり）の移動する羽音があり
枯れ林の梢をじりじりと圧しちぢめる冬空、
最しく空にくひ入って行く枝が組み合ひ
眼に見えぬ空の流れをさぐり行く凄じさ。

群鳥は荒々しく空の奥底をねらって飛び立ち、
色、響き　あらゆる形象が青空を犯さうとするが、
空しくつきもどされて大地の林に浮び出る群鳥、
青空に残される絶対の静けさ、形なき青空の形ばかりが……。

深みの深み、底の底　清い青空には何ものも生かさぬ意志（はたらき）がある、
我々の生は彼處より投げすてられ、
奥底より激しく浮び上る日光、愚かなる鳥はくりかへし飛び立ち、

この残酷な明るさの前、一點の塵となって止まることもない……。

0040　暗い雪（習作）

にぎやかだが怖しく靜かな、暗いがどこか明るい冬、
夜とも晝とも見分け難くふる粉雪、
默々として雪をただよはす空から大地への底さ、
暗默のうちに音樂が孕まれ、見えてゐる存在の裏に、
シンシンと力がつもり遠い連山に浸み徹らす空の青さ、
それて行く石切りの蒼石よりも美しい　．。

冬は青空をのみこみ永遠の暗さを背負ふ、
小鳥らは死に絶え、誕生は未だ告げられない、
定かにつかみがたい激しい雪のうねり、底に沈む寺々、
ゆりうごかされ、おしながされ　自づからくだける鐘が音響(ひびき)、
おしつむ雪がつきやぶる墓場、

慄へぬ空が怖ろしい

明け方ら暗い山河大地の上を超え　じりじりとにじみ出る熱、
寝りゆく木の芽の上に雪はそうそうとしたたり、
地平より近づいてくる眞黒な鳥の群が目ざす彼方、
ただよふ粉雪はチラチラと降りつづき、空は未だ未だ暗い、
かすかに山から山へ……大地から空へ……雪をふるはせて、どよもす音の明るさ、
すがすがしい香気がゆるゆると雪の底から溶かすだらう、
　木の蕾のほぐれる春が間近い……。

一九三五年　二三歳　＜竹内勝太郎逝去の後の詩＞と毛筆で朱書。以後、活字。
00421　人形の午後　9　新集37　＜ふみとどまって＞4・ふみとどまって　＜金貸爺＞
7・金借爺　＜水をあび＞10・水をあび、＜たてて＞11・たて、　＜あの泪＞15・あの
泪に
00422　パイプ　10　山繭183　新集91　＜花びらのやうに＞18・花びらのように　＜つめ
こんだ＞新10・つめこんだ湖　＜ゆずられた＞新12・私にはゆづられた　「湖」と「私には」

は底本では鉛筆で抹消してある。

843　雪豹　10　新集128　＜ありのまま＞＝・ありのまゝ　＜見える＞25　見へる　＜負うて＞ま・負ふて

844　松と夜の吹雪　10

空のすみずみまで領してゐた鋭い松の葉がジリジリと空の壓力(おもみ)でとがされて行き、
降って氷りついた雪ばかりが白雲となって遠ざかる、
枯枝の明るい影と流れ行く奔流のかゞやく雪野原、
昨日も、今日も、こゝに人形達はやって來た。

爽かな風は平らかなあらゆる雲をあらゆる方向(むき)にたらし、
日は影を涯もなくくっきりとしたこの原っぱに草飼ってゐる、
松はもう消え失せて土の中に浸みこみ、地の底で靜かにがうがうとうなってゐる、
雪は光り、はせちがふ風の叫びばかり。

人間の小っぽけな手がいつか作った畑のうねもあぜみちもうづもれて了って、

小さ、かしい犬も羊も見えはしない、
父も母もない朗らかな鶏が自由の唄を歌ひ、
人形の眼に漂ふ雲の影。

地平線は青空の涯にぐるりと圓をかき、
誰が見るのでもないこの白晝の明るさ、
言葉も道具もなく、美しく浮らかな人形達の身體ばかりが
よろこびの靜かなふるへを傳へ、無數の指のさし示す日輪の虹。

がうがうとうなる大地は渦をとき、もどす海洋の體の如く、彼方
見えてくる町々にそろそろと夜明の電車が走りはじめる、
そのまゝに青空にとけ込んで行く人形達、
愚かしい人間共に闇と暝がもどってくる。

まっくらな雪野原に、雪と空とがふれあって動かない

そろそろと明けて行く朝、街々の尖塔が金色に輝き、
野にあがる湯氣の底に人々は鋭い松の葉の雪を見るだらう、
人間の手から永遠に盗まれた人形世界、人間は朝々、松を吹く吹雪の聲をきゝ逃す。

一九三六年　二四歳

0045　春の時計　3　29　山繭92　＜變ったやうだ＞14・變ったようだ

0046　受胎　3　29　新集39　＜かかる＞9・かゝる　＜ただよう＞10・たゞよふ　＜かからぬ＞11　かゝらぬ

0047　無題　4・4　新集42　＜向こうに＞1・向ふに　＜ききいる＞27　きゝいる

0048　犁　4・4　山繭132　新集46　＜春のやうに＞山8　春のように　＜羽音をきき＞山・新11・羽音をきゝ　＜おびただしい＞新21・おびたゞしい　＜ゆうう＞新23・いうう　＜去りつつ＞山・新14　去りつゝ　＜しがし＞新28・併し　＜あって＞新31・在って　＜きき＞山・新33・きゝ　＜快い疲労が悦ばしい＞宝・新35　を山繭では前の行とあわせて一行とする　＜つつみこむ＞新39・山38　つゝみこむ　＜憩い＞新45・憩ひ　＜あたたかい＞山・新末・あたゝかい

0049　MHに愛と愛とを以て　4　28～5・1　この作、底本では、ペン書で　行わけに

ついての大幅な訂正の指示がなされている。例えば題は、（MHに）愛と愛とを以て
となっており、本文の第一行と第二行を合せて一行とする、といった調子である。題は
見出しの便宜でもとのままにしたが　本文は指示によって改めたものを掲げる。

この火、この花　この限りない樹木と小鳥の生を、汝らの両腕の間に置く、
日の遊ぶ大理石（なめいし）の建築を抱く四つの圓柱の腕の如く抱け、
汝らのもの　汝と汝のもの、女であり男であり、清らかな少年の思念の如き、
この空、この大地に芽ぐむ青麥を抱け
汝らの目のひそやかな會話をもち、
紡ぎ出せ、この空を、この土を　花々の雄々しい莖と子房と花びらを、
人々の全き愛をのみほす汝らの盃を、建（きづ）き出せ！

新しい酒を汝らは私の前に、噴き出させる、
私の悦びを清らかに澄み徹らす汝らの愛と愛を私の上にかけよ、
蜂の蜜、小鳥の巣、この美しい營みを花飾るすべての野と野の間に、
日の花びらを汝らの肉體にまきつけ、汝らの洗はれたるくるぶしを置け、新しい潮

を踏め、
湖の上、海の上、微風と光の上に、
あの白雲の自由なる脚を學べ。

汝らの兩腕は豊(みの)りたる指と指とをからませ、
世界の涯より涯へ、野を抱く匂やかな花びらを作る
雨をよび、大地(つち)の上　あらゆる種々(くさぐさ)の芽をめざます火と母のくちづけを、汝らの瞳
　の中に點火せよ、
火と火を育て、汝らの健やかに伸び行く疲れない生を、
一人の青年と一人の少女のうちに怖れなく火をそゝげ、
胸と胸のいつまでも繰返す、新しい海の波、波を　波を、
汝らの波打つ海の、肉體の精神の水平線の晴やかさを證(あか)せ、新しい一つの波を生み
　出せ。

汝らを教へ、導く嬰兒の瞳が、汝らの行く方、行く方に生み出される、汝らの世界
を蔽ふ花びらの上、

汝の蜜蜂　胡蜂、蜜の降る汝らの花びらの上に
汝らの青空を清らかに太らせよ　空と土にさゝげよ、
汝らの愛の正義を　汝らの克ちを　規律を、
花を超え、波を超え、花蜂の唸りを超えるもの
汝らの母　空と大地の汝らをうづめるにまかせよ、
汝らは土にとけ　青空にとけ、二つの人間となる、
その重なりの美しい青を、正しい思想の朝暁の空氣を私が前に種播け－

火と花と海を、人間の美しい闘ひを讃へる
汝らの愛の言葉は一すぢに空へとけ、大地に浸み入る、
その行爲の汝らに戻って來る時の永さを悦べ、
晝と夜を抱け　汝らの抱擁の中、人々を抱き、この私を抱け、
流れよる海を　日の洪水を、規律ある青麥の畑を、勇氣ある雲雀の雛を、汝らの瞳
を超えて生かしめよ、
汝らの生ける墓標、あの汝らの肉體をして語らせよ、
明るい花と海との、打ちかへす波と波との、怖ろしく嚴しい價値轉換、烈しく香り

ある汝らの脱皮の色を。

機械の奥深く、かがやかしいあの光の吸收、きびしきうなり、
汝らは一刻一刻、この巨大なる比響きに驕き入り、
機械は汝らの肉體となる、この生產機械、
惡德を燒く火の酒、精神の酒、汝らを超える未來の人、
あの無數の童兒の幸福の叫びをきくか、
色彩の智慧、線の智慧、禮拜せる空と土は慧智ある美、正義と自由のうねりを見る、
きけ、きけ、汝らの肉體の唸る、落着ける確かさのダイナモ、決斷と勇氣のピストン　積まれ行く無限の積電量を、
征服の決意！太陽が永遠の位置をねらひ、あの美しい姿勢をとる、汝らの行爲を
愛す！

＊第二四行の「克ち」は「克己」の誤植ではないだろうか。

0050 牛 10 24

牡牛　牝牛がもうもう乳く、
明るい野原をなでて行く雲の影、
啄木鳥が頭巾大事に逃げまわり、
風の巨きさ。

遠い山には木の影、
近い山には草の影、
ぽっかりと空は豁き、
雲の早さ、日の豊さ。

仔牛らは母牛の乳に眠り呆け、
一面の草はなびく、牛の腹、
香氣で、はてのない風の行方に
つちー杯にねころんでゐる山々。

0051　野山　10・27

日日無爲、誰に拘らう、あの
山の一本一本の樹のやうに、
己の影を動かして暮してをる、
空には風と太陽。

我が動きやすい心は
大地の上に撃ち砕いた、
蜜蜂や花虻がキラキラ光る、
蜜柑畑のか黒さ、

空には雲がのろのろとおしよせる、
あそこで量られる私の感覚、
雨の感情の總量、
山々に意志は任して省りみない。

年老いた狼が美しい雅羊を殺戮する、

山々は雲を、大地の上へ雨降らす、
私の頭上には正午の陽、
我が肉體はなげ與へられた、大地の戮々。

0052　放たれた狼　11・5　新集52　〈すすき〉3・すゝき　〈狼は草を〉5・狼　併し　草を（新集は、底本にみえる鉛筆書き訂正に従っている）　新集第七行の〈怒り
なき〉以下は底本では別行　〈つましやかさ〉10　つゝましやかさ　〈かぎりなく冷
たく〉13　かぎりなく熱しかぎりなく冷たく　〈しかし〉19・併し
0053　新生の歌　12・1　新集55　〈こころ〉2 17 20・こゝろ　〈今甦る、〉13・今甦へる
この心に（新集は、底本の鉛筆書き訂正に従っている）　〈ただ〉28　たゞ
0054　春の憶ひ　12・24　新集93　〈野鵐〉9・野鵐（じこ）　〈ここ〉19　こゝ
0055　繪皿の時計　12｜1937　4・2　山繭108　底本には（小さいスケッチ）という副題
がついている　〈めぐる〉1　旋（めぐ）る
一九三七年　二五歳
0056　ハイエナ　1・8〜3・3　山繭122　新集133　〈殺戮〉山・新8・殺戮（りく）
0057　日没　1　8〜3・14　詩中の〈密蜂〉は蜜蜂の誤植か。

とげとげしい霜は太陽の光にとけ、
つやつやしい露の珠は葉末に光る、
早起の小鳥らはもう森の巣に居ない、
残された新しいわらのなつかしい香り。

地平香かに海のうなりに交る
密蜂の名残の音がきこえる、
戀人よ私はその密蜂の悲しみを背負ふ、
美しく健かな希望(のぞみ)は私の愚かしい行爲にくづされて。

私の愛するもの、私の奉仕へるものを失つた私、
盲目な働き蜂はその女王をあやまつて殺した、
その巣箱の上、今日の日光は訪れるが
混亂と絶望のうめきごゑのみ見つけ出す。

小鳥らは野や林の中にあつて、一日たのしい、

怖ろい鷹や鷲が目さとく空をかすめてはゐるが、
小鳥らの歌はいつもひびく、生きる時はいつも生の歌、
彼らをくらくするものはあの雲のかげりの外何ものもない。

微風は吹きすぎる、敏感なトンボは今、
老いたる感覚に死の親しさを感ずる、
地の涯より動かしがたくにじみ出る雲のひろがり、
何一つその重々しい進路を得変へまい。

疑ひ深い私の心の　ピリピリとのびて行く裂け目裂け目の病ひ、
戀人よ、かうして　明らかなる爾の晴れやかさを私はぬりつぶした、
人を生かすものは祝福はれてあり、ほろぼすものは呪はれる、
戀人よ、今こそ、涯しなく爾の罪人である私のために祈ってくれ。

たのしい小鳥は日暮れまで怖れなく空の下にあそび、
密蜂は死と破壊にまで行くにちがひない、

はや愛する人の愛を見失った私の盲目の額の上に
私のうめきは私のいのちを苦しめる。

0058　春祭の唄　1・30　新集59　＜輝りかがよう＞[2]・輝りかゝよふ　＜こころ＞[4]・こゝろ　＜ここ＞[4,14,18]・こゝ　＜かかる＞[5]・かゝる　＜ささげ＞[15]・さゝげ　＜そそげ＞[15]・そゝげ　＜かがやき＞[16]・かゞやき　＜かがやく＞[20,56,60]かゞやく　＜ひびき＞[24]ひゞき　＜そそぐ＞[30]そゝぐ

0059　風と太陽　2・8

風は居る、雲の裂け目に、
脱白の風は雲を引き裂く、
太陽は鳥をつれて遁げ、
苦笑のやうに、やさしく音もなく降り積む雪。

ふって、ふって、ふりつゞいて、もうあきあきした、
あてもない怒りの泡から浮ばれない、

たのもしいのは海邊の岩ばかりだ、
その上に正直ものの太陽は縋る。

空しい業は空の雲、地の人の生活、
賢い犬は鼻尖で雪の獸を嗅ぎ出し、
すっかり雲を吹きはらふ風、
どれほども翔べぬ鳥だ　空のまん中に釘づけられたのろくさい午後の太陽。

0860　白梅の花　2　26　新集96　〈こころ〉16・こゝろ　〈自分〉20・自ら

0861　煙草　3　3　新集135　〈丹念〉7 單念　〈ゆうつ〉8・いうつ　〈寒〉15
足なへ　〈ほほけて〉16　ほゝけて

0862　愛の歌　3・17　四、五、六連に〈トル〉と鉛筆で注記・

夜はかなしい、
けれどあなたの炎は私をあたゝめる
晝はうれしい、

けれどあなたはとほいかなたにねる。

この夜と、この書を重ね、
この夜と、この書を掘り出し、
私はあなたの言葉をほぐし、
いつもなつかしいあなたの姿を織る。

瞠いた優しい眼には愛の静けさを、
悲しくつぐんだ唇には愛の悦びを、
私は織りこみ、私はそれをよみがへす、
あなたの姿の澄みきった言葉よ。

私の織りものには孤獨の泉が汲め出され、
私のあなたには愛の苦しみが鏤りこまれる、
けれど織物はいつか裂け、
あなたの笑ひがひびくのだ、私の惱みが癒されるのだ。

夜はかなしい、
けれど愛の炎はもえてぬくめる、
晝もかなしい、
けれど時の鈍は悲しみを斷ちきる業を忘れはしない。

この夜と　この晝を耐え、
この夜と、この晝に生きて、
私はあなたの言葉をときはなち、
いつもなつかしいあなたの聲音をおもび出す。

瞠いた眼には愛の力を、
悲しくつぐんだ唇には愛の誓ひを、
夜も晝もよみがへらさう、
時をたぐり、時をはこび、育ってゆく私らの愛は。

私の織りものには苦しみの泉がある
私のあなたには臆病なためらひがある、
けれど泉は、やがて悦びの光にあふれ、
あなたと私は祝福はれる、あなたと私は祝福はれる。

0063　微風のいたづら　3　30

稚い蕚は梅の花瓣を踏んで一日遊び、
微風は私の目瞼を吹いて目ざます
青空の柔い高さよ、愛するひとの瞳のはるかさよ、
梢には見えてゐる木の葉の重なるかゞやき、
誰もが私に怠け者といひ、誰もが私に微笑んでゐる、
だんだん私を蔽ってゆく梅の匂ひは
なつかしく戻ってくる過去の一日一日
私の上にかけられた愛を數へて私の目瞼は幾度か閉ぢ……。

ふっくらとつゝむ梅の花びら、やさしくあそぶ鶯の仔、
どこまでも春の呼吸がきこえてゐる、
私の愛するその人の貌はやさしく私の目瞼に匂ひ、
私の、ひとりねころんでゐる林の中、杳かなるその人の、聲音をはこぶ微風のいたづら……。

0064 盃の酒 7・13～11・21夜 新集65 ＜おいて＞3・をいて ＜さゝげる＞5ま・さゝげる ＜実＞6・實り ＜終わせ＞7 終せ ＜かかげる＞10・かゝげる ＜汝＞14・15・爾 ＜こころ＞17 こゝろ

0065 正午の悦び 7・19 新集67 ＜ああ＞25～40・あゝ ＜おお＞6・24・30・34・37 おゝ ＜ここ＞10・17・ここ ＜さゝげる＞15・さゝげる ＜おしちぢめる＞21 おしちゞめる ＜かがやく＞49・かゞやく

0066 風の童子の唄 7・20～11 1 新集99 ＜向こう＞2・向ふ ＜きゝ＞15・きゝ

一九三八 二六歳

0067　芭蕉葉　1・19　山繭114　＜山々＞3　山山　＜おお＞7・おゝ　＜止まり＞
。　止まりて

0068　正午　10　28　新集103

0069　彫る人の姿に　10・28　新集103　＜ままに＞9・14・まゝに

0070　壺　12・12　新集101　底本は各連五行で第一連第三行＜この永遠の破片を尚裂く
もの、＞第二連第四行＜平和なるものの鳩、いさかひの火花瞳に浮かす鷲、＞第三連第
一行＜人間の汚辱はこゝに最も美しき言葉を産ませ、＞を＜トル＞、ペン書）と注記し
新集はこの指示に従っている。なお、＜ここに＞3・こゝに

0071　墓地　12・12　新集139　＜降り＞16・降り　＜わが詩＞17　我が詩
一九三九年～一九四〇年　二七歳～二八歳

0072　墓　1　25～3・19　新集142　＜数え見る。＞39　数へ見る、　＜おお＞40ま　お

0073　噴き上げ　以下日付なし　山繭118　注記＜詩集＞＜昭和二十三年八月二十一日大
中虎次パイプオルガン伴奏にて放送＞　新集106　＜暑くし＞9・暑くして　＜瞳＞
。瞳と　＜こころ＞15・こゝろ　＜噴き上げ＞16　噴き上げ水

0074　悪夢のごとく　山繭120　注記＜詩集＞　底本では4433の十四行詩だが鉛筆・
ペン書きの両方で指示して　第三連の第二第三行を＜トル＞第四連と合わせ四行一連と

しまた数字を改めている。山爾はこの指示に従っている。〈くづをれ〉[6]・くづをれて　除いた二行〈危い猫ののびをして　軽々しくて、〉わたしの運を傾けて……。〉〈苦しい〉[*]・苦しくて。

0075　或日海底の詩人の頭蓋が言ふ……

わが墓はかしこ濃緑の潮を重ねる
重量の怪物、絶えず反轉する不眠の物、
對流する海底に動かずある頭蓋骨、　　*二のころがらめ頭蓋骨ヲ挿入スル
*うつろな眼の窩の内より、私の言葉を噴き上らす頭蓋骨。

悠久とも永遠とも虚無とも、
何故にそのものをその名で呼ぶか、
光の海がひたひたよせる大地の極點に
お前、わが肉づける胴が煙となる時、
わたしは打ちかへされる砂であるのだ。

わが肉を養ったかの厚く涼やかなる空、
その空は永劫うつむいたる天蓋もて封じ、
ゆるやかな草や樹のほとりに爭鬪を飼ふ、
残酷の噛む溫、下劣の倒す至高、
すべては人間全体を打ちかへす盲目な意志の君臨するまゝ。

このとき、時を選ばずわが頭蓋はその歴史を語り出でる。
わが足をさらった石を、わが転倒を、
谷底深く急墜するわが記憶のうちをかすめた像を、
わが口を出た叫びは他人の悲鳴に異ならず、
わが時間はマホメットのそれのごとく一瞬もてわが生涯を經歴(へめぐ)る。

わが生を移し植えたものよ、ここに
顯れ來って語るか、否といふか、
わが肉體は生きたるものさながら
岩ほとばしる瀧津瀬におし流され嚙まれて

堅い巖のころがるさまに水底に沈みつゝ渦まく水に血を混じる。

渦まく水は古き呪文の形をまく、
重き雷は日毎の雨に呪文を打ち碎かうと光り唸り、
むごく鋭くわが詩の如く緊密に愛する水底の岩々の牙よ、
彼らの愛はわが屍をとゞめることを欲し、
何ものにもましてわが精神と肉體との交叉したかの頸部を好んで噛みしめる。

涯ない情欲のわが生きたる日々を貪婪にむさぼるごとく、
飽くことのない水流の誘ひを堰き岩々は水底深くわが屍を噛みては噛み、
底もなく生命を否定する冷気はわが死にたる皿肢をもてあそびやがてその棲處とする
「心あればこゝにとゞまり雨の好む死と侶に棲め、
かゝる美くしい誘惑に抗し得る如何なる屍を雨は持つといふか！」
この上もない愛人、これらの水と岩につくられた深處、

こゝにわが屍はゆられて日々を送り、
萬物を支配する日の流し目も
ふきちらす水のしぶきにこゝにはとゞかず、
我が屍はしばらく岩の如く水の如く永遠と思へる。

妬む太陽は幾萬の雲をよせ、幾百萬の雷鳴を聚めて、
いら立ち怒り、やがては、折々のやさしい愛の晴れる空を見せ、
期待を裏切られた憤怒もて再び山々にきらめく稲妻をつきさす、
水上に雨うちふらす彼の巧緻なるたくらみを見よ、
水面にその影うつすかはせみの羽ばたきの間も彼はわが屍を奪はうとする。

「わが肉は任ることに倦む、速に
わが肉體を放ち去り水の流れるに任ね、
蛆蟲生むかの蠅、肉さきくづす豐蟲の類に饗應せよ、
わが肉は萬物より養はれたもの、
今は萬物にその贈物をかへさうと望む。」

わが屍の秘やかなこの願望は岩々を怒らす、
彼等は我が屍を噛み、又噛む、
愛しさは憎しみに、又憎しみは愛しさに急変し、
再び愛しさは憎しみとなり、「去るなら去れ！
只　爾の頭蓋、この頭蓋のみは水と岩と冷氣の中に残し去れ！」

「人は光と暗とより成る、頭蓋は闇黒、
爾はこの内に爾の苦悩を收め　爾の死の思ひを培ひ太らせた、
爾の光はひとり爾の闇を得てその光輝を示す、
爾の醜い肉慾が爾の聖い破片をつないだ如く、
爾の頭蓋は爾の肉體の美しさをつむぎ　數百の詩篇を手もて書いた。」

「邪しまな回收者、萬物の資本家、
かの太陽が爾の肉を空宇にかへさうと求めるなら、
無知なる者、爾が、爾の妻ののぞみの如く

雨の肉を人間の眼の前にかへさうと求めるのなら、
雨の頭蓋、この最も雨に親しく、最も雨に遥かなものを残して去れ。

水浸す脳味噌に早　記憶の襞も失せたのに、
重く積み、刻み了せた慧知の谷も流れ去つたのに
わが晃は　日の光の悦びの憶ひ出その時も盡きず
頭蓋をこゝの水底に沈めつゝ、渦まく水にゆられて
螺旋なす深い段階をめぐり上る、人間の思想さながら、無に歸するのぞみに傷を震
はせつゝ。

美しい日の光も、今は、おゝ今は仇か、
わづか頭蓋の冠物、永き間わが知性の深い叢であつた半白の頭髪ばかり胴につけ、
波打ち騒ぐ水の面をもてあそばれて流れ漂ふ
打ち上げられて粗きむしろに並べられ
粗暴なる黄金の蠅もその子を產むを躊躇する冷たさのみをはこびつゝ。

わが頭蓋、わが胴の上れるあたりを見上げて過ぎて幾週日、
今は打ちかへす波打際に日を浴びることをも知らず、
脱かれたる慧知と意志の空しき函となり下つて、
悠久とも永遠とも虚無ともその名よぶことを妨げぬ大海の底、
かの眼の窩ぬく海草の暗き赤味につらぬかれて。[6]

わが墓はこゝ、大海原の對流する重き節理のうちに居る、
あたりにはその名をもつか否かを疑はれるもろもろのもの語り了せず、
墓、墓、この上もない深く空しき、墓、
その墓の文字は解きよむ人のあるか、
數少い頭蓋の骨の噛みあふ線のうねりのあと。

＊この詩は未定稿であるが、しばらくこの形で發表して置き、他日手を加へたいと思ふ。

0076 水邊の暮の時間と 新集108 〈いただく〉[4]・いたゞく 〈かかる〉[10]・かゝる

＜終わす＞[14]・終す

0077　私の時計　新集112　＜ここに＞[9]・こゝに　＜不機嫌＞[20]・不氣嫌　＜笑いは残るだろう＞[15]・笑ひを残すとしよう（新集は底本のペン書訂正に従っている）底本末行は＜青空＞の上に＜數多の時計は鳴るのを遠慮し、＞がありペン書〔　〕で囲む

0078　落下　ペン書注記＜詩集　散文形ニクム＞

いかめしいうつの泥の沼、泥の沼、いうつのいかめしい黄金の光ぞ射す！
枝は枝に、幹は幹に　蟲は蟲、小鳥は小鳥に交らしめよ、日は泥沼に！
泥の沼、いかな地獄を爾のまどろみは生み出したことだらう……
種子は梢より葉を打ち、枝をかすめ、幹にはねて、毒の泥土のうちにぬくもる。

遠い眺めの涯には地平が見え、そこからは又地平が見える、
空しい望みに駆り立てられた裸の獅子が素早く過る葉越しに深い日の光、
裸の獅子が素早く過る葉越に深い日の光に駆り立てられる虚空への回帰のおもひ涯
　ない、
あゝ、乞食、きらびやかな爾の森や平原や人間や文化！泥沼！泥沼ほどに落着く！

土臺の石は山々の殘酷な脾腹の傷がうづく場所より、泥は谷合ひの汚れた凹み、
桃色の瓦は鳩の白さに適しく　塔の窓、青空の圓みを透かして平和である、
おゝ　平和である　平和である……泥沼の平和の底で水すましの姿が逆にうつつて
！
日の光、沼をくぼめては重みをかける、湧く蟲とメタン瓦斯……いゝ組合せか！
いかめしいうつの木目磨かれた酒場の卓の上にあるわたしの手、燈の光をしい
ー
女は男に、女の胸は男の胸に、女の腰は男の腰に何と泥沼の臭ひを放つことだらう
ー
泥沼の臭ひ？……否、否、われらが罪業ほどに美しい酒瓶の光醉へ！
罪は女より男へ流れて、二つ皿、天秤の敏感度程心は慓へる。
永遠、枚ひ、はたまた流れ波打つ生、……泥沼に一つの島があつて住めるのだ、
日輪の重みさへぎる枝と枝との組合ふ姿は蛇に似て　泥に咲く數多の花は星に似る

あゝ、惡意！輕蔑や憎惡のなかに光を見出す程の術知者で眞にあるなら
來りて住み見よ……。

0079　忍耐　＜赫く＞にサイドラインと？が、また第五聯全部を＜トル＞とペン書注記

暗い地べたの底で何といふ忍耐！
一瓦明り　燃えつきる最後の光輝を
暗い地べたの底で何と待つことだろう。

蒼空も眞白の花もがらみあふ肉も、すべては積まれた、わたしの掌の窪に、
枯れ葉の散るを追ひつめる日光の視線の
そのありやうは死に向ふわたしの行ひのさま。

暗い地べたの底で何とわたしが笑ったか！
笑はねばならなかった！苦笑から微笑へと、
白晝の星の光がこゝに鋭いとならば、

わたしの笑ひは哄笑へと壓し昇る。

わたしの脚は浮められ……とは、罰の前にいさぎよいこと、
罰の重みのいや激しくあれと、わたしは罪を忘れなかつた、
暗い地べたの底で何とわたしが待ちこがれ、何と赫くあつたか、
はぢらひ、後悔、　それといつて、死は餘りに遲く準備される。

蜻蛉(せれ)も飛び去り　白鷺すらも葦の内にもはや潜まぬ、
すべてわたしのうちに積まれ、結晶し、
青空の徹れる上に透き徹る死の豫感、
細く高くわたしの魂は脊のびして死に適ふに！

暗い地べたの底で、何といふ忍耐！
一瓦明り　燃えつきる最後の光輝を
暗い地べたの底で何と待つことだらう。

0080　従順　新集74　＜ああ＞12・あゝ　＜こころ＞14　こゝろ

0081　雪の如くに　新集115　＜こころ＞3 15・こゝろ　＜おお＞6 7 18 19・おゝ　＜恥じつつ＞7・恥ぢつゝ

0082　幸福

わたしは書物をなげ出した　殊に大げさな思想を、
それからわたしの貧乏が親しい、
何がわたしをこの上に富ませることが出来やう！
わたしはすっかり豊かなのに。

だから、ひとびとはわたしから立ち去り
孤獨の時間を與へてくれた、
詩を満たすのはわたしの業だ、
それをひとへ惜氣なく注ぐせよう！

與へるために微かに來て、

風のやうに逃げ去りたいものだ。
詩をかもし、みたすのはわたしの孤獨のうちに
けれど、それは人々の酒。

0083　童女　第二連を入トルVと鉛筆書で注記

青い空氣がわたしにうつった、
白い花びらがわたしにうつった、
思ひ出や遠い希望にまでも梢は鳴り、
梢から梢へまっしろの花粉はとぶ。

わたしの祈りは戸外(そと)へ開かう、
たれしも幸福な時ばかりではないから、
暖かい雨の響きがゆるやかに
こころの傷をうるほせばよい
思ひもかけぬ鈴の音はわたしのからだに

ひびいてゐるが、たれも知らない。

わたしは童女、澄んだ瞳、
わたしの前に跪くが良い、
青い泉にはかがむが良い、
古への騎士は額を垂れ恃むところあった
そしていま　矢張り鷹は空をゆき、
野獣は空を見上げてゆく。

0084　罪者　山繭[96]〈詩集〉とペン書注記
0085　スタヴロギンの詩　題の上の空白に〈「象徴」或る〉とペン書で注記し　本文の四ヵ所にペン書き訂正指示がある。ここではその指示に従う。

縄重く脂塗られてわが掌のうちより垂れ下る、
この室に一點の灯あるのは闇の暁に傾く形だ、
誕生の聲わが瞳の周圍にこめやうものか、

温かく静かな時計の響きを誰が知る。

梁は高く釘は厳しく、わが手帳には
わが掌のうちに握られたわれの次！を記してある、
自由なわれ　…誰が自由であつただらう。
温かく静かに時計の音はわたしを曳きゆく。

梁は高く釘は厳しく、わが手帳には
自殺の順序誤たず記してある、
人々のために十字架豫定したあの人には似ぬ
……さて、復活することなど思ふことか！

縄重く脂塗られてわが掌のうちより垂れ下る、
吹き消される灯の殘りの煙匂ひなつかしく、
われひとりのためにわれひとり求めた首吊りの式
……さて、この儀式の靜けさほどに

時計の刻み、一つ一つに愉しみこめてひそやかであれ、
暁のわが屍に忍びよる愛ほどの
冷たい情すらわたしに無くて時は過ぎた、
……屍がつぐなふほどの

美しさ、屍のうへに下るまい、屍は醜く、また無氣味に
まさしくわれの生涯の墓に適しくあるだらう、
……縄重く、また、わたしの生も重く
ゆるやかに首しめる縄のごとくにわたしの行ひも非情であつた！

0086　スタヴロギンの祈り　新集148　〈汝〉・爾
0087　哀憐　新集151　〈ああ〉5，あゝ　〈もどらぬ〉14・もぐらぬ　〈ほほえみ〉末
・ほゝえみ
0088　春への答歌　第二行うへにのにを〈を〉とし第二連　第四連を〈トル〉とペン書
注記

春が來る、
冬の間におれの鍛へたもののうへに
輕々と乘り越えてゆくものがある、
おれの期待に正しく應えて
それはおれより美しく輝く。

おれは飛翔するあいつの翼ではない、
おれはあいつの正しく瞳である、
おれの炎のなかで世界は恵み深く
おれの方へと照りかへす、
おれは昨日より輕く明日より重たい。

かうして春は來る。
問ひかへすためにではない、
與へるために、享けるために、
おれのあいつがゆくには

おれのつき固めた積雪の反照が要った、
昆蟲の子のごとく、おれは知らずに
おれの翼をやしなってをった。

……

あいつの翼の一打におれはくだけ散り、
自由な海としてひとの前に豁ける、
小鳥らを山奥へとかへすあの
ひとしらぬ交代の時のうつり、
それはまたおれの靜けさの證(あかし)。

0088　椎の若葉　山繭98　宮本では第三連の第三行以下は〈あちらにもこちらにも小さい墓がある〉お師匠様の瞑福祈る弟子達の建てた墓〉なつかしいこころのひとを生きかへらせて　とろりとろりと生きさせたい。〉とあり、第三・四行を反対にすることをペン書で第五行を〈トル〉と鉛筆書で指示、山繭はこの指示に従っている。また〈T.S.K〉とペン書注記

0090　燭臺をめぐりて降りしきれ

—井口浩君に—

一搏ちごとに高みゆく
巨大な翼の年老ひた天使は
地の上のあれの農家を羨やむ、
一基の蠟燭のもとに
それはそれは暗い昔噺が
誰しみないに語られる
おお　自愛の男がひとり
巨大な天使を悲しませる。

かかる時雪は降り來たるものと知れ、
古い　ひとしれぬ言葉で
天使が傳習する物語りと知れ
水の邊の葦はそよりと雪をたのしみ、
おほかたの言の葉は淀の流れが
のみほしては海へと運ぶ、
悠々たる往來のそのさまは適はしいだらう、
こころの美しい人は悲しむだらう。

一基の蠟のもとに　それゆゑに
深い月夜の暈が下り、
月夜の吹雪は人慕はしく戸のすきより
ふりしきり、ふりこみ、そして積もる、
一博ちの翼は運命ゆゑに
天使は地上の白い耀光を離れてのぼる
一基の燭臺にしたたる蠟涙のほとりに
目に見えぬ童女はひとり眼をひらく。

かかる時雪はその身を深く緊め
ひとしれぬ書物を月の平野に示すと知れ、
知れ！若いひとの時として誘はれる
水邊の葬のつぶやきは何を説示するのだらう
淀の流れはただに　か黒く海へとゆく、
美しい童女ら一基一基の燭に沈默し
遠きも近きも華やかに寂しい宴だらうか

寧ろ巨大なる天使の翼を斷ち、地上の雪に新しい文字を示さうよ。

0091 夜なく牛　山繭124　注記〈詩集〉ペン書

0092 四辻の荷馬車　山繭126　注記〈詩集〉ペン書　〈焦(じ)れ焦れ〉3・焦れ焦れ

0093 泉　山繭112　〈泉のさゆれ〉10・泉のさゆれは寂(さみ)し　赤エンピツで〈は寂(さみ)し〉を抹消　〈詩集〉〈昭和二十三年八月二十一日放送〉とペン書注記　新集118

0094 青麥　山繭116　ペン書注記〈詩集〉

0095 啓示　第五第六行を〈トル〉　第十四行と第十八行の後に行あけの印を朱書

朝あけの露は何ものかの掌をうるほし、
朝焼けの紅は何ものかの頂を染めてゆく、
ああ、わたしがどうして
永生に憧れないことがあらう、
白日に輝く海の頂に尊んだ時間を
どうして、大地の波打ちに眺めないだらうか、
微風は低くくりかへしくりかへし

大地に向って語る、
人間は繰返し繰返し植物を育てて、
皿李の言葉を大地の上に刻みつける。

青いねぎ畑の蒼く勁い光をわたしは信ずる
神も動物も植物もわたしらの上で變った、
一切の意味が變光するのは
朝あけの空の神々しい轉變の啓示するところ、
救ひは空よりも　土よりも來る
一切の太陽と、一切の梢を信じるがよい、
最も苦く、最も年老いた大地の
苦く苦く生きるものの向日を信じよ。
屍は立ち上り、額を垂れ、空氣に混ざるだらう、
永い凝視、そしてあの永い支へ、
それら一切の高く深く遠くあるもののうちに
日は昇り、日は落る。

0096　墓地の春　山繭100　ペン書注記〈詩集〉

一九四一年　二九歳

0097　春愁　5　2　山繭　ペン書注記〈詩集〉

0098　蕨とりに　ペン書注記〈昭十六、七月号　文芸文化〉

或る人に代りて

暖い日あたりに
乾く山みちの邊の
草草に未だにあるのは
暖い曉の露

曉の明星よりも
いくらか永く生きのびて、
けれど幸あるわたしとても
いつかは失せる時も來る。

けれどけれど
たのしさはやさしいをとめと
手をとりあってわらびつみ
もう春は闌けたけれど

やがては山に雲はかかり
やがて激しく日は照りつけ
山山のわらびは葉になるが
いまのまに、さあ妹。

山の脊の日あたりに、
思もかけず育つわらび、
わたしらのよろこびも
そこかしこ

昨日もたのしくけふもうれしく
昨日は土筆、けふはわらび
摘んでも盡きない山の幸は
ほんとにお前の魂に似た。

暖かい日あたりの
山のなぞへのわらび子、
燒よせて、さあ妹、
お前の瞳の光りをお見せ。

0099　黒部川　山藺140　＜祈れ、祈れ、醜く平べたい屋根を超えてV4・祈れ祈れ、祈願せよ、／醜い平べったい屋根屋根を超えて4,5　＜空に向って祈れ、空に向って旋回し、屹立するがごとく。V6　空に向って祈れ！／わたしの魂が大地の液體をしっかり吸ひ／大空に向って旋回しつつ屹立するやうに。7,8,9　＜さうして來ん春の小さい固い芽が散らされた。V11・さうして來ん春に芽生く小さな固い芽が散らされた、14底本では第二連はここで切れない。＜岩々の間にV13・　岩々の間より16　＜空しく群衆の

*うごめく巷の風に〉[14]・空しく　風に[17]　〈師は流れ去つたもの〉[15]　師は巨山雪峯[18]　〈師の行方は知れず、人跡は未だ到らず……／さうした歌をわたしは歌ふ。〉[16]・[17]・人跡は未だ到らず、ただ／天童の指南車のかげりはつづく、……[19]・[20]　〈ものここを〉[16]・ものがここを　*二字分の空格は誤記

0108　パイプ　11・1　山繭[145]　山繭では詩の後に五行の文章がついているが底本にはない。

0101　わが童女

昭和十六年夏小豆島森家に寄寓す。森家七才の長女森ひろ子ちゃんの思ひ出

ねらひを定めるやうにわたしは見る、
うしろざまにわたしは船出する。
茶いろの瞳のうちにわたしは消える、
その時わが童女は埠頭の上から大聲で怒る。

何と途法に慕れさすことだ、
わが童女には優しいお父さんが有つて、

しかも童女はわたしの子になりたがる、
船出するわたしを怒る。

だから、毎日毎日わたしは覚ってゐる、
わたしの孤獨は黄金の盃のやうだと、
願ひもせぬ浄潔な酒が満たされると、
かうしてわたしにはわが童女の記憶があると。

ああ、そのやうにして胸のうちに
美しい親しい人が何と多くあること、
わたしが孤獨で寂しいといふことはない、
わたしの耳朶には可愛いい怒りが今でもきこえる。

0102 雪の山 第一行全部と第十二行の〈それは……知れないが〉を〈トル〉 第十三行〈さうして〉を〈さういふ春を〉と訂正、第二十一行のあとに一行あけ、第二十三行と第二十四行を合して一行とし、末行の〈雪橇はゆく、〉を〈ゆく雪橇、〉と訂正する

よう朱筆で指示。ここには訂正せぬものを写した。

見判かぬものは火に灼かれぬだらう、
選ばれたもののみが融けて
雪の山と一つになるだらう、
寂しい空はつやめいて
一つの鈴の音をひびかせ
天の涯に童子らの橇を馳り走るだらう。

誰も見たもののないそれら童子の速かな影は
雪山のふもとの初雪を染めゆき
暉光と夕焼けは光を重ねるだらう、
和らぎある牛と馬は冬中つながれて
もしかすると彼等の瞳は見るか知れない、
輝かしいまぶしい春を、それは遠くの昔かこれからのことか知れないが。

ああ、さうして稚い日にわたしは見た、
輕々と捲きつつ空ゆく雪雲の眩さと雪山の峯の發光と
さうしてわたしは呼び聲を空高く聽き、
埋もれた樹樹がそちらへゆらぐのを見た
選ばれてわたしは橇に乘り、憶ひ出と約束を地に播き、
並び合って鈴のやうに清らかに笑ふ童子らと進んだ。

わたしの降らせた雪の一片一片の
あの淨潔な春はいづこへ落ちて行ったらう、
いづこの土に、いづこの時に、
ああ、今も尚わたしは疑はれてならぬ、
幾億萬年の時光がいるのか、
わたしが耀く春とめぐり合ふのに、
天の涯を雪橇はゆく、そして牛も馬もそのために永い冬を和らいですごす。

0103 その時詩人は

一

枯葦のキラキラ光る毒野に
乏しい水は淵をつくり、
黄金の翼の水鳥は
も早南の方へ去って了った、
その時詩人は一日畑を打ち、
白菊の残んの香りを聚く、
かうして日の落ち去ったところに
數多の灯と數多の水たまりが
キラキラ空へ向って光る。

二

涼しい風が出た、
人々は嚴しい寒い夕といふだらう、
さうして暖い雪は
やさしい者たちの心につもり
冠しい者たちの心につもり、

瞳はかり残った詩人には
この世が春の如く思はれる。

三

數知れぬ戰死者の一つ一つの運命を
詩人は知らない、知ることが出來ない、
詩人は棟に立ち荒々しい風に立ち、
數知れぬ星の去來を見守る
そこには龜裂する空があり、
言葉を發しようとする幼兒がゐる、
未來の童子童女のために誰一人死ぬることを怖れぬ
そのやうな誓願の碧い空がある。

四

やがて曉がやって來る、もう
一片の曉の光が花開き、かけた
全く新しい意味を恵むために
曉の光は樹々の梢より下って來る、

ああ眞向の空は
われらの古くの祖先らが見たものだ、
さうしてこのやうに交代を見、
ひろがりゆく深い空氣を聽いた
けふの空には飛行機が南を指す、
その南の碧空を憧れて飛ぶ
われらは幾世代の不思議な燕だ
われらは空のうちに消えて現れ
新しい名となつて飛ぶ、
涯といふものはあるまい、
空は時と共に深まりゆくから。

0104　桃の花　山繭 87
0105　融雪童子　山繭 102　はじめの六行をヘトル　21・8　6Vと鉛筆書注記　山繭は
これには従っていない
0106　月の光に　II　I　山繭 146

0107　美しい夜　12・6　新集122　＜どこまでも＞6　どこ迄も　＜向こう＞8　向ふ
＜：　：＞14　も早、微笑みばかり　音もなく漂ひ、　新集は底本ペン書指示に従って
いる　別に＜(裸像)＞とペン書注記

一九四二年　三〇歳
0108　薪割先生　1・15　底本では題は＜薪割先生・炭焼先生＞となっていて二詩は同
日作の連作らしいがここでは便宜上二つに分けた。10　11　15行を＜トル＞と鉛筆指示

亭午の日射し　また松の梢の
ちらちらと光る高さ
枝うつりする頬白は
用事があつて　居るわけじゃない
白い髭のぼうぼうのびた先生は
わたしの知つた人ではない
森閑とした人界の
ずつと高みの方で

老人は薪を割る、
斧は柄が朽ちてゐるかのやう、
碁石は砂の上　松の葉に埋められて、
どうしても深い深い山又山の向ふの
これはまひるの日射しである、
老人先生の白い袖がひらりと動く、
さうして薪が二つに割れる、
ああ、これは陶器の青い空である、
老人の傍の酒壺は朱の鮮やかな
さう云へばくろがわのやうに嚴しい
松風のやうにかすかな器である、
酒盃の緑、酒の黄金、
老人先生の御名はきく由もない、
薪割先生は薪を割る。

0109　炭焼先生　山蘭㈱　へなれて、V，・なれて　へ下りてくる、V₃・下りてくる

＜下に、V4・下に　＜訪ふV6・訪ふ　＜焼くV11・やく　＜なしや、V14　なしや
□□□　一人の童子が　＜抜けV3を＜抜けるV に、＜村があるV14を＜町があるV に
＜ゆくV17を＜追ふV に訂正し、第六連を最初にもっていって第一連とする朱書指示が
ある。ここでは底本のままを写す。

さ、あ見つけた。明るい空の
一羽の燕が
篠原を飛翔し墓原を抜け
黄金色に輝く緑の椎の葉にふれて。

一人の童子を見つけた。明るい瞳の
眉の直ぐな童子を見つけた。
幾萬の囁く木の葉、幾萬のうなづく草の葉、
ああ　さうして褐色の何といふ屋根。

一人の童子が歩いてゆく。明るい村の

静かな静かな街道のまひる、
一羽の燕がかけってゆく。涯ない地平の
空にとけてゆく淡雪より迅く。

満ち足りて微笑みつつも去って逝った
白髪や禿頭の老人たちが迎へてくれる
その街道に沿うて村があり、村がある、
藁屋根があり、舟があり、旗がある。

一人の童子が歩いてゆく。燕が空を
音もなく軽やかに辷ってゆく、
まっ青な花が高みにひらいて
山山に雪は安らってゐる。

わたしは見た。或る宵に粉雪の光の中に、
人々が最後の棲處をうしろに曳き、

青々と水脈(みを)ひるがへし進むすがたを、
ああ、この街道を今は飛行機がゆく。

〇二二　老人　山繭130　〈座り、〉〃　座り

〇二二　貪乏　新集153　新集は底本の鉛筆書指示に従い第一連と第三連から各二行を抹消している、〈しっかり……〉の行の次に〈期待は貪しさを苦しめるが／事実は貪しさをわたしに惚れさす、〉、〈貪しさはわたしと……〉の行の次に〈危なさは貪しさの氣に入り　わたしは好まぬが／いづれにしてもまるでわたしの膚のやうだ、〉

〇二三　兩親　山繭104

〇二四　静かなる宵に　2　全五章のうち第一第二章は山繭

三

幼い童子は己の墓より起き上る、
しづかな雪の囁き、草の葉の囁き、
童子は重さといふものがない、
あの子の足跡を誰が見つけたらう、
ひとの瞳は星のやうに涼しく光り、

そのゆく姿を誰も見ない。

耀く雪の日の山坂を小さな後姿で
駆け下りて行ったわたしは
あれは悪てなかったか
ゆるやかな魂のみになってゆく
その永い時をわたしはここですごす、
折々怪しく爽やかな光が空から来て
金色の獅子をわたしの額へ追ひ込む

四

金色の厳しい年老った獅子、
ああ、お前はペルシヤを通り
支那を通ってやって来た、
いづこにもお前の餌はあり、
お前は又、餌である、

お互に呑み合ふ静かなものを
人は世界と呼び、それを瞳に收めたがる、
けれど金毛の獅子よ！
お前の一つ一つの毛の
一つ一つの金毛の小獅子を
にこやかに見たひとにお語り、
その人は誰に似てゐたらう？
そのひとを釋尊とたれかが言つた、
けれど釋尊も　告げたひとも死に果て、
お前の金毛の數知れぬ瞳のやうに
正義も邪惡もやはり光つて滿ちてゐる。

五

雨が靜まる、その雨の激しい頃
わたしの愛したのは木の葉のざはめき、
そして今はわたしの息さへきこえない、

死ぬ時には星も泉もわたしと共に涯へ来て
涯ない方へ乗り超える、
そこには女よりも深い空無が寝ってゐる
雨滴に映る月光よりも數多くの
いろいろの運命がそこで靈となり
誰一人行方を見たものもない、
わたしは女を愛したのかしら、
ああ、わたしが何かを告げる時には
ひとは最早聞くことが出來ない、
ざわめく木の葉は静かなる木の葉と離れる、
ひとは自らの昨日と離れる、
木の葉は空へ吹かれて消え、
また或る葉は奈落へ向けてしづしづとゆく。

印刷された詩はこれで終り、その後に毛筆の〈あとがき〉がある。〈あとがき〉〈二十一年九月記　丙丁子〉は墨書　他は朱書

あとがき

正晴十九歳昭和六年秋志賀直哉の紹介に由り竹内勝太郎の門に入る
二十歳七年秋「三人」を起す
二十三歳拾年初夏の頃師不慮の死　以降門に遊ぶ者　伊東幹治　北脇島雄　高林武彦　中村晃　堀内進　房本弘行　矢ヶ崎恒子
三十歳昭和十七年晩春「三人」解散　以后詩を発表せず
ここに收むるもの二十歳より三十歳に及ぶ十一年間の発表詩せ
師の急逝後いくらか自立せるものを自ら感ず

二十一年九月記　　丙丁子

わたしはたぶん昭和十五年の節分に、京都の壬生寺の一室で『三人』を初めて読んだ。富士正晴の名とその作品に接したのはその時だ。昭和十六年七月の日記には井口浩の「約束」という詩を写している。しかしわたしは「三人」を購読するということはなかった。そんな才覚はなかったのだ。

昭和二十一年三月復員し、その七月、小さな新聞社の記者となった。ほっつきまわる

あいだに乏しい財布をはたいて手に入れた古本の中に竹内勝太郎の著作が十冊ちかく
その跋文や解説を書いているのが富士正晴であることに感銘をうけた。原稿依頼の係と
なったとき、手紙でたのんだ三枚の原稿を一週間ほどのちに手にし その美しいペン字
にしばらく見入ったことを覚えている。
詩集『山繭』が、わたしのはじめて入手したかれの著作である。
一九六三年三月雑誌『VIKING』に「二十年つづきの感想」というかれの詩がの
った。

水車はとまっていた どうしてか？
そのしかけは都会育ちのおれには判らなかった
水車はとまっていた、そして
水はザーザーと空しく水車の箱を打っていた
その下の透明な 余りにも透明な冷たい
小川の中に 彼は逆しまにどっぷりひたり
その首は斜に横顔をゆるやかにゆすり、
薄目をひらいたまんま、髪を流れにまかせ

死んで、冷えていた（と、おれは思う、）
しみいるほど静かな谷合いの小さな部落の小川で、
それは葡萄という部落だった、
彼は透明な水のなかで冷え切ってゆれていた、
しみいるほど静かな谷合いの空の下で
こいつは死んでいた、銃弾を頭に受けて、
こいつは死んでいた、冷たく水に冷やされ、血の筋を流れに少し混ぜながら、
おれはそいつの頬を水をとおして見た、
それだけであった、小鳥の声もきかなんだ、
今にして思う、死はかくのごときものだ、
蒲団の上においても、また沈む船の船室でも、戦場でも
ひとは死ぬ、ひとりで、だが、まあ、何とか、つねに美しくだ。

戦争が終ると同時に停ってしまった時間が、この詩を読んだとき軋み出しそうな感じがした。停った時間は、しかし、流れだすわけではない。
ことし五月のある日、この詩をよんでいたとき来あわせた若い友人に見せた。

読み了えると閉じて机におき黙っている。「どうですか」ときくと「死は美しくなんかありませんよ」とはね返って来た。虚をつかれた感じであった。そのあと、ふたことみことしゃべったが、あぶくのようなそんなことばでわたし自身どうにもならなかった。

わたしがながい間、富士正晴のすべての作品を読みたいと思ってきたのは　死を、だが、まあ、何とか美しく、思うのはなぜだろう、と気にかかったからかもしれぬ。

初期の詩篇を読み了えたいま、たとえば「血の筋を流れに少し混ぜながら」という発想が初期にすでにあり、それがかれの一つの核みたいなもんだな、というようなくだらん思いつきは残るが、肝心のところがことばにならない。

富士正晴に聞いても答えるまい。ほかに言いようがないから、二十年かかってこの二十行を、かれは書いたのだ。作者としてのかれは、なすべきことをなしたのだ。

気にかかるのは、読者としてのわたしである。読んだ詩について、いちいちしゃべらなければならないわけではない、けれども、この詩について、わたしは自分のことばでなんとかなっとくのいく説明を自分に対してしてやりたかった。

数日まえ、雑誌で「日暮れて道遠し」というかれの最近の小説を読んだ。鄭板橋を主題にしたものだが、三十枚では書けぬ伝記を、その題でしめくくってあるのが印象的だった。

少年兵の死を見てのちのかれの歩いた道のりは大したものだが、これからの日暮れ道も、傍からながめているだけでためいきの出そうな、遠い難路のようである。

かれの一つの詩に対するわたしの気がかりがいつ解けるかわからぬが、やがてわたしにもやってくる死が、それらの一切からわたしを解きはなつことは確実であるように思われる。

（一九七五・九　一四・　寅雄）